

小田原史談

特別号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

オリオン座と東宝館の閉館に際し

映画館特別号

「しにせ映画館八月閉館、オリオン座と東宝劇場……」という新聞記事に、「エ〜」とびつくり仰天しました。

これで、中心市街地に映画館皆無となります。市民の楽しめる魅力的施設として、市街地の活気ある雰囲気演出に貢献してきた営業が、またまた消えて残念です。

小田原市街地には、城下町時代からの繁華街・松原神社界隈と、小田原駅出現からの繁華街・駅前通り界隈との二極あって、調和し共存共栄して、市街地を盛りあげてきたのは、周知のことです。

オリオン座は松原神社界隈、東宝館は駅前通り界隈の地にあつて、人の流れの目標となり、その通りを賑やかにした功績は大です。商店街の小売り・飲食等の

客にもなつて、一帯の活性化・潤いに加勢してきたことは、衆人認めるどころです。

映画鑑賞が唯一の大衆娯楽であつた時代、在(田舎)の人々をも吸引してきた映画館でした。正月休みや盆休・祭日など余暇

のある時に、「小田原に映

2003年(平成15年)7月12日(土曜日)

THEATER ORION

しにせ映画館3月閉館
小田原市の中心市街地

神静民報

オリオン座と東宝劇場
郊外型大型館に押され客足激減

8月20日で閉館となる小田原オリオン座

創業当時のオリオン座

画観に行くか」と、人寄せ抜群の映画館でした。老若男女の遊び楽しむ格好の映画館でした。

上映画面より世の中の様々な人間模様を知り、喜怒哀楽を味つた映画館でした。

市街地から映画館皆無となるにあつて、各自それぞれ思い出をもつ映画館を、一情報として編んでみました。

「民間事業に光を！」と願う立場からの取材で、郷土の映画館小史です。かわり、ふれあい、愛した人たちから聞き書きした記録集です。

1、二極の映画館
石井富之助氏(元・市立図書館



▲昭和23年頃のオリオン座

「目でみる小田原の歩み」より

長は、「明治以後小田原劇場物語」を遺されて、各々の映画館を知る好個の資料となりました。これに新聞各種の記事や、聞き書きを加えて、今の小田原市域にあつた映画館を見渡してみました。

①松原神社界隈の映画館

終戦後に展開された各映画館と所在地を一瞥してみます。

○オリオン座

○富貴座

○小田原日活劇場

(国際劇場)

(復興館)

○小田原東映劇場

○小田原中央劇場

〈少し離れて〉

○御幸座(みゆき座)

これらは、松原神社周辺に立地という特徴をみせています。

北条氏綱は大永元年

(二五三)に、小田原の町

屋づくりをおこない、

この中心に松原明神

(明治以後に松原神社)・

玉瀧坊をおいたとい

ます。(小田原史跡めぐ

り)立木望隆著)宮小路・

宮の前・高梨町・青物

町など、北条氏の進展

と共に整い、江戸時代

に引きつがれたとみて

います。

松原神社になって

も、町の総鎮守として

町民の尊崇をうけて栄

えました。近くに官公

庁や学校が設置されて、人の集散する所でした。

宮小路など花柳界は

「常に芸妓百人以上を

抱えて、長くこの界限

繁栄の大きな源泉と

なった」といいます。

(小田原叢談・石井富之

助著)

明治政府の規制緩和

があつて、寄席・劇場

などの娯楽施設建設が

許されます。

「明治二年七月四日、

小田原城下の玉瀧坊維

持のため、境内に芝居

寄席の舞台を設置する」

これが事始で、小田

原市街地の娯楽施設第

一号です。以後、同類

の館が続出しました。

○鶴座が茶畑(幸町)

に明治九年開館。

○幸座が宮小路(幸

町)に明治十四年開館。

(火災焼失明治二十三年)

○若竹座(幸町)に明

治二十六年開館。これ

を富貴座と二十九年改

称。

○電気館(映画館)茶

畑に明治四十五年開

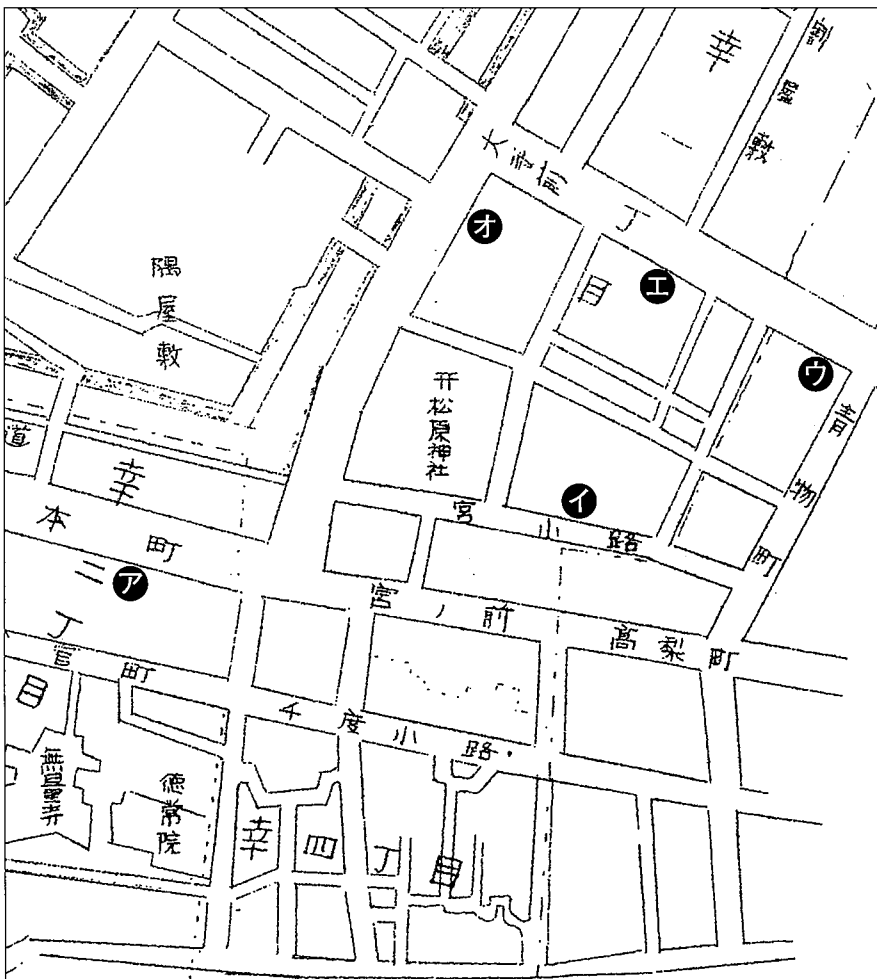
館。

○有楽館(幸町)電気

市街にあった映画館

	館名	開館	閉館
ア	オリオン座 吾妻座 有楽館	S21 S6 T2	H15
イ	富貴座 若竹座 幸座	M14	S32
ウ	小田原日活 国際劇場 復興館	S28 T12	S56
エ	小田原東映	S31	H12
オ	小田原中央劇場	S31	H4
カ	小田原東宝館	S14	H15
キ	小田原銀映座	S31	H12
ク	小田原ロマンス座 小田原オーケラ劇場	S28	
コ	御幸座	T8	S59

※空欄は不明



▲小田原市旧町内新旧町名比較より

館を買収して大正二年開館。これを吾妻座と大正六年改称。

○大正館(緑新町)に大正二年開場。

○御幸座(屋町)大正八年開館。

○復興館(青物町)大正十二年開館。

○娯楽館(代官町)大正十二年開館。

○清楽亭(幸新道)寄席大正十五年開館。

○オリオン座(幸町)昭和二十一年開館。

○小田原国際劇場開館。復興館を昭和二十八年改称。

○小田原中央劇場(幸町)昭和三十一年開館。

○小田原東映劇場(幸町)昭和三十一年開館。

(以上、「小田原市史別編・年表」すると、

○松原神社は、小田原市街地娯楽施設発祥の地といえます。

オリオン座閉館は、この地興行の終焉を意味していました。明治二年から一三四年の歴史を閉じた。松原神社界隈の大衆娯楽興行でした。

◎松原神社中心に町づくりがなされた時(文永元年)からオリオン座閉館をみると、四七二年経過となります。

北条氏の城下町時代、徳川氏配下の小田原城下町・宿場町時

代、明治以降の役人行政時代の中で、繁華街の核として発展し、活気をもたらし、町勢を盛り上げてきた土地柄でした。

見方によっては、四七二年の歴史をもつ松原神社界隈の繁華街といえます。

この土壌に育まれた映画館連、この界隈の魅力に引きつけられた映画館連に思えます。

いわば、北条氏時代の町づくり遺産の上に展開された映画館連という趣きです。

これは小田原特有の現象です。

◎この界隈の魅力は、人が集まってくる盛り場雰囲気にあると考えます。

相次ぐ大衆娯楽館出現が、人寄せを増幅させて、街の通りの賑やかに加勢しました。

買う・観る・飲む・食べて楽しむ。快適に遊べる商店街に、目的的に集まり、盛り場雰囲気が高めてきたとみえます。

各商店街も、映画館の動員力からうける恩恵大であること

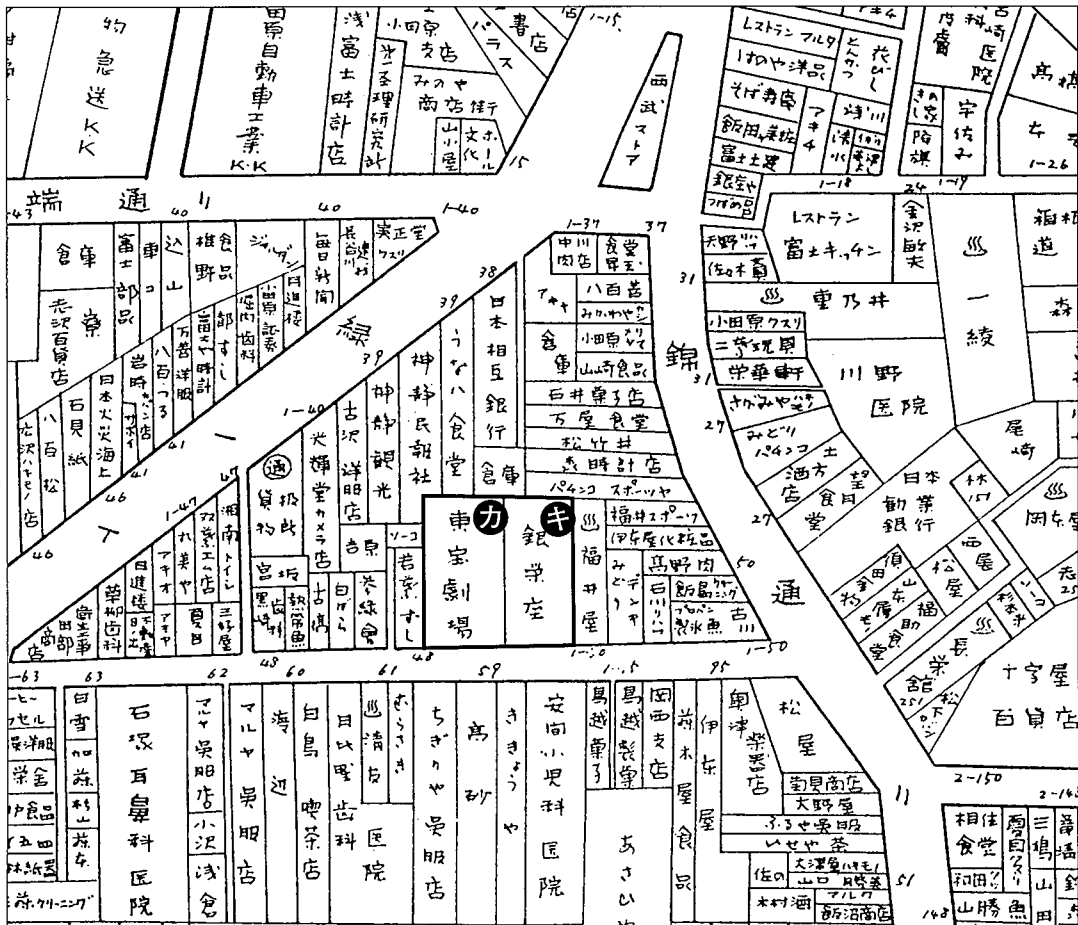
と思うものです。

②駅前通り界隈の映画館

この界隈に、小田原東宝館・銀映座・小田原口マンス座(後に小田原オークラ劇場)の三館

が立地し、人気を博していました。

この地は、小田原駅開業(大正九年)によって発展した新興地です。特に私鉄三社(小田急線・

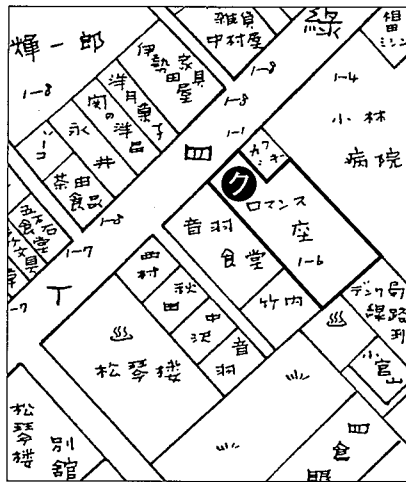


▲小田原市明細地図より

大雄山線・箱根登山線の小田原駅乗り入れは、人の集散を際立たせました。近郷近在の郷村からの人をひきつけました。駅前一带は近代都市の様相をつよめ、繁華街化してゆきました。

この賑やかな人通りに期待して、小田原東宝館が立ちあがりまます。採算良好な土地になった証で、駅前通りの成長とみまます。やがて在来の繁華街を凌ぐ駅前通りに発展し、銀映座・小田原ロマンス座を生み出しました。

▼ロマンス座所在地 小田原市明細地図より



利三郎(料亭天利)等の共同出資による設立でした。「定員八百名の洋館二階建、外観内容ともに、当時の地方活動常設館として最高」といわれた有楽館でした。

この地は、城下町時代に「片岡本陣」という貴人の宿泊する公認の大旅館の跡地でした。(会報一九一号で紹介) 参勤交代で定宿関係にあった大名(松平隠岐守十五万石松山藩等六大名)の利用が知らされています。(中村静夫氏研究による)

明治になると、皇后陛下御泊や御休、天皇陛下行在所になった旅館でした。

映画は日活(日本活動写真真K区)特約で発売し、天活(天然色活動写真真K区)特約となり、西洋物との併映で興業し

2、映画館情報

①オリオン座

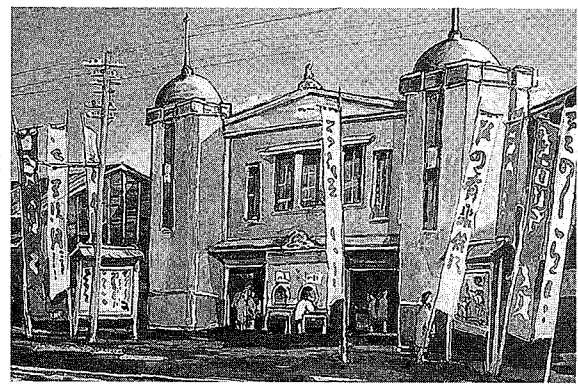
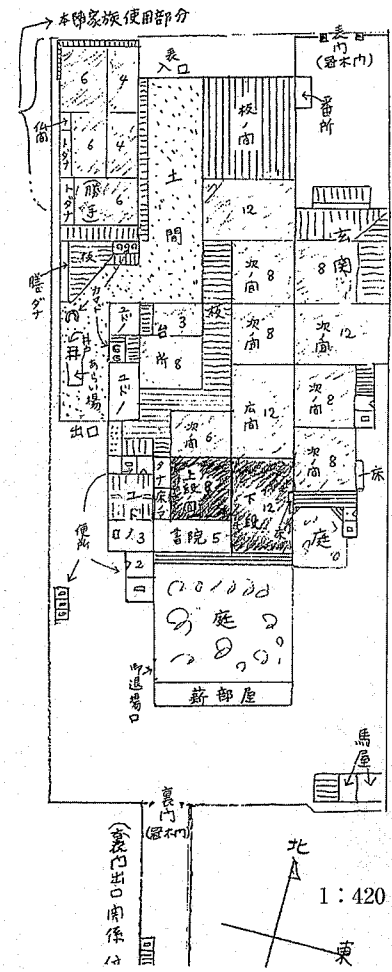
オリオン座は、有楽館(大正二年)吾妻座(大正六年)オリオン座(昭和二十一年)の歴史がありました。大正二年(一九一三)から見ると八十年、買取した電気館の開業(昭和四十五年)からみると八十一年余の興業年数でした。

○有楽館時代(幸町)

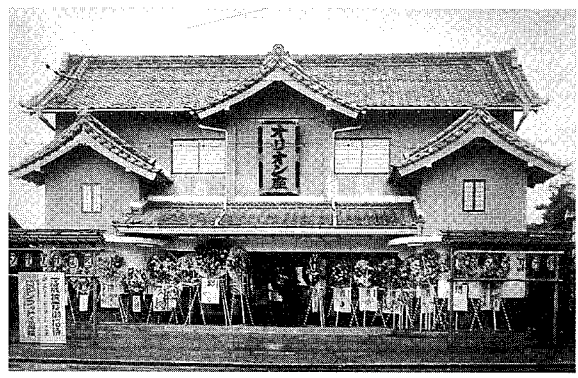
小峯徳次郎(物産販売店ちんりゅう)広沢

▼片岡本陣の見取図 中村静夫氏提供

片岡本陣 安政6年頃
原田小田原駐園芝館蔵



▲有楽館の容姿 「小田原 古きよき頃」木暮次郎著より



▲開業時のオリオン座 オリオン座提供

たといいます。

○吾妻館時代

「大正六年十月には館名を吾妻館と改め、再び日活直営となつて、石井常吉支配人の経営となったが、大正大震災後は復興されなかつた」ということです。

(明治以後小田原劇場物語)

○オリオン座時代

先代鮑屋市川敬太郎さん等の尽力により、昭和二十一年オリオン座として再出発しました。左の写真の容姿は、江島陶器店(十字町)三代目岩田忠介氏が、

▼閉館時のオリオン座



東京の歌舞伎座を参考にデザインしたということです。
 ○川口啓介支配人談
 洋画の封切り館として出発し、邦画も併映しました。日活や松竹・大映など、お客様が入るといふ映画を選んで契約し、上映しました。
 昭和二十八年からは、松竹系の常設館でした。「君の名は」植山節考「喜びも悲しみも幾歳月」「二等兵物語」など、入りきれない程の人気で、いい思い出になりました。
 旧館当時は三四五席(一、二階)に立ち見を入れて、一日約三千人のお客という大入りが続いたよき時代でした。
 上郡や下郡、下田や伊東の方からも見えました。下田方面の方は、途中の熱海に映画館があつても、小田原の方が魅力的で来てしまったそうです。
 その頃の小田原は大都会とい

うイメージが強く、着飾って映画を観に来てました。
 ラジオで流行の音楽を味わい、映画でその内容を楽しむ世でした。「君の名は」「宇宙戦艦ヤマト」など、ラジオ放送で人気になり、それが小田原の映画館に来たということ、つまり、主題歌でお客が集った時代でした。
 自分だけの時間を楽しむ一時でした。
 昭和三十四年がピークで、次第に斜陽産業の映画となりました。業界を襲った大きな波が四つありました。
 ①テレビの出現
 ②ビデオの発達
 ③テレビで映画放映
 ④外資系シネコン支配

厳しい時勢の波でした。
 映画館は世の喜怒哀楽の映像を通して、感動を売る・分かち与える所と思えます。「見て

良かった」と思える映画を、採算を考え選んできました。
 ②富貴座
 富貴座は、昭和三十二年(二五七)火災後、再建されず、その永い歴史を閉じました。富貴座の前身・若竹座の開館明治二十六年(二八三)からみると六十四年の興業年数でした。
 若竹座の前半の幸座(開館明治十四年(一八八一)からみると、七十六年の興業年数です。いづれにしても、この界限映画館の祖で、賑やかな人通りをよびこんだ最初の館でした。この賑わいが魅力となつて、周囲に相次ぐ映画館となり、映画街の形成となりました。
 初めの頃は日活直営と洋画との興業で、大正十五年頃松竹特約になったといひます。大震災後再建され、松竹映画を続映しました。
 昭和二十年八月の空襲で消失、翌二十一年復旧開館、松竹映画上映でしたが、まもなく



▲日本映画ポスター集 東映時代劇篇より

当十・日夏・期超・特別大興行・名篇揃

●真に之鎖夏萬斛飛躍の第一陣●
 大日本聯盟映畫提供 嵐長三郎改嵐寛壽郎
 原作 大佛次郎・監督 山口哲平

●連續大衆時代映畫 鞍馬天狗 全十巻●
 嵐長三郎改め 嵐寛壽郎 第一回主演
 山本禮三郎 中村竹三郎 尾上松緑 五味國枝 助演

●松竹キネマ蒲田本年度超特作●
 監督 大久保忠素・全力傾注作品
 哀傷悲戀 源の名曲 鐵の處女 全十巻
 名花 松井千枝子 無比の快技
 田中絹代 鈴木歌子 結城三郎 三田英児 他 キヤスト

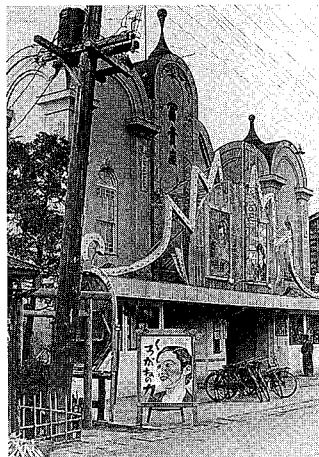
●松竹キネマ京都 特作大時代映畫●
 監督 小石栄一・原作 志摩沙良夫
 林長二郎主演 千早晶子 若月孔雀 助演
 復讐 劍の血煙 全八巻
 劍戟

富貴座

▲富貴座のチラシ

高野肇氏提供

▼富貴座 小田原市役所提供



洋画専門館にきり変わりました。

池谷務氏談

明宝株式会社が、三島市に劇場を三つ持っていました。小田原・富貴座の高杉安蔵さんから話があつて、明宝で富貴座を経営することになったのです。昭和二十七年、八年あたりと思います。

洋画のシネマスコープ(細長い画面を、小田原で初めて上映したのが富貴座でした。洋画はファンが多く、見に来てくれるので、採算がとれました。

ずっと洋画を上映しました。「ローマの休日」「シエーン」など、大入りの人気でした。

洋画上映のため洋風に片かなの「フキザ」としました。

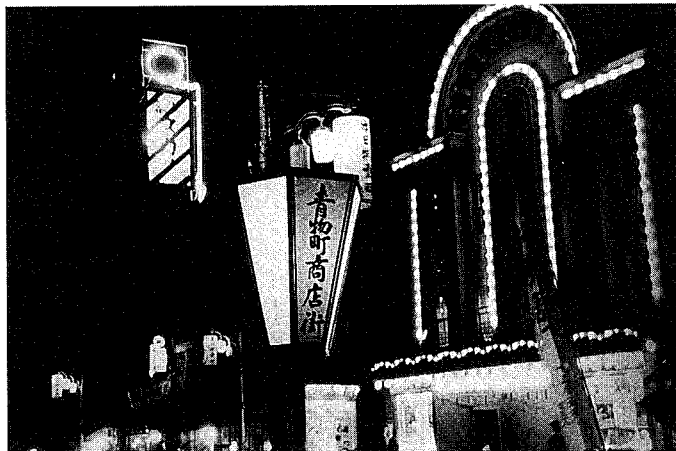
③小田原日活

小田原日活の前身「復興館」は、関東大震災後の大正十二年十二月の開業でした。正しく復興を象徴する館でした。経営者は地元の角田久五郎さんで、東京の映画館に従事の方でした。

日活映画上映館として出発し、震災後の自由華やかかなりし頃の日活映画を上映して、ファンを魅了したということです。京都の太秦撮影所の時代劇は、すべて復

小田原市役所提供

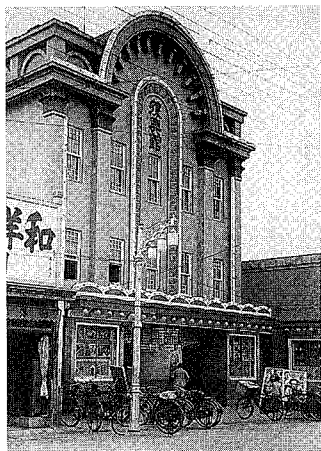
▼復興館の夜景



興館で上映されました。昭和二十年八月の米軍空襲で焼失しましたが、同年十二月には早くも再開しております。関東大震災後、空襲羅災後、共に立ちあ

がり早く、角田さんの意気込み躍如しています。昭和二十八年十二月、鉄筋コンクリート建の近代映画館を建設して、大映、東映の上映館となり、「国際劇場」に改称しました。

高野肇氏提供



▼復興館のちらし

昭和三十五年には太陽企業K

K経営となり、小田原日活と改称し、またまた日活上映館となりました。昭和五十六年七月、閉館しました。五十七年の興業年数で、老若男女楽しませた歳月でした。植田博之さんの話

「復興館からの帰り、美政屋のかき氷(冬は今川焼)を食べるの

時代劇・現代劇の小唄週間

故澤田正二郎最後の當り狂言
大河内傳次郎復歸第一回主演

小唄 省掛時次郎
葛木香一・酒井米子・尾上助三郎 助演

★絶対定評ある日活小唄映畫★
紅屋の娘(シネホリト) 巻七
紅屋の娘(シネホリト) 巻七

瀧花久子主演 二水鏡二助演
義経部 進 助演

無失理キツ一似細妹篇
高速度珍婚膝栗毛 篇劇活喜
演主氏スクンパ・イテンモ けほとお

モテンカ・ロー|| 戦争 覇 戦

當る七月十二日やお盆特別興行

十四十五十六十七日
午前十時より開館
平日午後三時より

省掛時次郎

復興館 日活超特作

が楽しみで、復興館——美政屋のこちよい帰り道でした。映画館と商店街との有益関係・共存共栄を示していました。

④中央劇場

昭和三十一年開業、平成四年閉業の三十六カ年興行でした。

池谷務氏談

富貴座の洋画興行良好から、「小田原はファンも多く採算とれる」と判断して、洋画専門館を明宝KKが創業しました。料亭やよいを買収しての、一般公募による株式会社中央劇場の設立でした。二宮呉服店二宮社長、読売新聞店の渡辺さん、国府津の落合信一さん等地元有志の協力がありません。

中央劇場は、アメリカ映画を主体に上映しました。人気のあった映画を選んで上映しましたが、何をやってもよく入った時代でした。昭和三十年代ですが、話題作も多い時代でした。「エクソシスト」は、一番入った映画でした。一日一万人ほど集まり、行列が宮小路をとりまく人気でした。朝十時開き、深夜興行(朝方五時頃終る)で要望に応えましたが大変でした。警官が出勤して取り締まる程の人出でした。

中央劇場は実演もやってきました。ハナ肇・植木等などのクレージキヤッツをよんだ時もありました。

した。歌手浜村美智子の時は、明大OB会とタイアップしたので、沢山の人が見えました。玄関のガラスが割られた程の熱狂ぶりでした。

中央劇場が指定席を作った先がけでした。二階を全部指定席(百二十席)にして、お客様が安心して鑑賞できるようにしました。一・二階合わせて三百七十席の規模の映画館でした。

小田原東映劇場は、中央劇場と同じ三十一年開業で印象的でした。東映の全盛時代で、片岡千恵蔵・市川右太衛門・東千代之助等出演の時代専門の映画館でした。

⑤御幸座

下の写真は三代目の館です。

初代は大正八年開業の館で、大正十二年の大震災で焼失しました。間もなく再建された館も、昭和三年焼失しました。

東京の早稲田劇場(大学近くの所)を買い受けて再々建、昭和五年一月興行を再開しました。経営者は、初

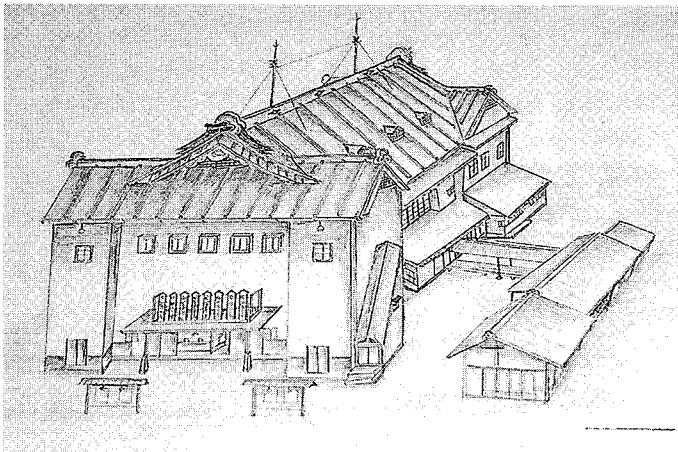
代の館の頃遠藤太郎氏、後に安藤政吉氏(二代目の頃か)でした。三代目の館の二年後あたりに相当の赤字が出て、曾我重五郎氏経営となりました。昭和三十五年頃に山崎茂次郎氏が御幸座主となり、昭和五十九年閉館となりました。大正八年開業から途中休業を含めて、六十五年の御幸座運営年数でした。

○曾我敏夫氏談

(曾我重五郎氏の孫)

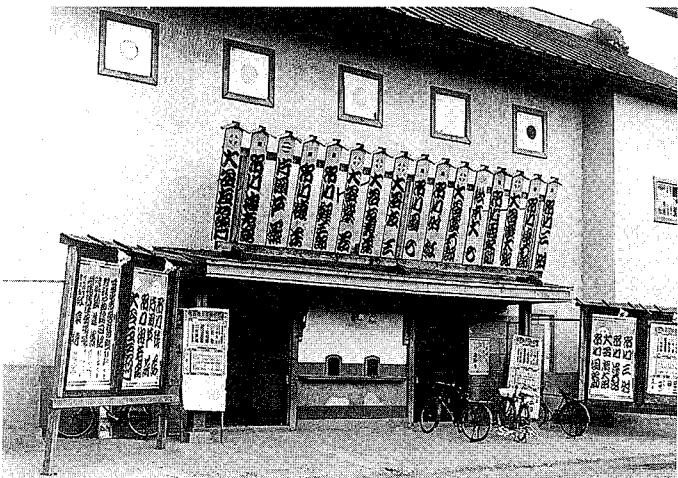
曾我重五郎が経営するにあたって、今近食堂(井細田)など五人の協力者があつたと聞いております。「曾我興行」という名称で、芝居を興行してました。当時万年町に劇団があつた。その芝居や、地方劇団の芝居を興行してました。

東京歌舞伎が京都で、関西歌舞伎が東京で興行する際、どちらも御幸座で興行した時代がありました。京都・東京で上演する前の総練習に、もつてこいの御幸座でした。どちらも百名前後でしたので、幹部は隣の風呂屋の二階、その他は楽屋で寝泊



▲御幸座全体のスケッチ

曾我敏夫氏作

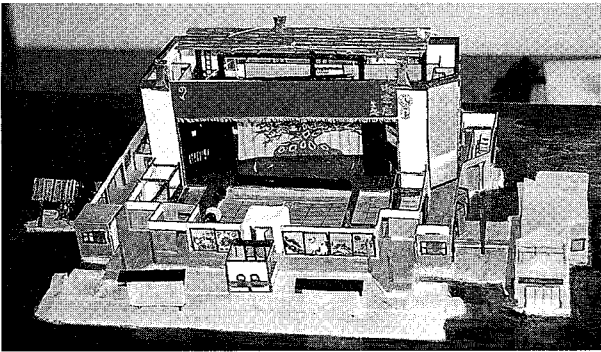


▲芝居小屋時代の御幸座

小田原市役所提供

▼御幸座の模型

曾我敏夫氏作成



りしました。
 おさらいの発表会によく使われました。舞踊・三味線・琴・尺八など、練習した成果の発表会で、それぞれ沢山の観客で賑わいました。
 慰安会にも使われました。国鉄や商工会・戦没遺族会・農協など、家族やお得意様の慰安会場になりました。お抱えの劇団ありで、もってこいでした。
 浪曲師興行の時は、舞台の上まで客席という人気でした。広沢虎造、寿々木米若など、大概の浪曲師が来ています。
 歌手も大概の人が来しました。来なかったのは、美空ひばりくらいなものです。オペラの藤原

▼閉館時の東宝館



昭和十四年設立で、創立者は熱海線小田原駅開業、私鉄三社の乗り入れ、丹郡トンネル開通による東海道線小田原駅という鉄道発達をもたらした駅前通りの築華街形成でした。「駅まで三分」という地の利が生んだ東宝館でした。

⑥東宝館

義江も来しました。
 講談師やサーカスなどの興行もやりました。青年団大会の会場になった時もありました。客席は畳でした。三百人ほどのお客が入れたと思います。最大入れば、五百人は入ったと思います。
 この芝居小屋は子ども時代から、遊び・手伝い仕事などでよく知っています。そこで「御幸座立体模型」を作ってみました。(写真参照)二階部分がとりはずしできます。一階部分がよくわかるように作り直しました。

下田や伊東の方からのお客がよく見えました。途中の熱海の映画館だと「同じ所」という思いもあって、小田原の映画館に来てしまふということでした。

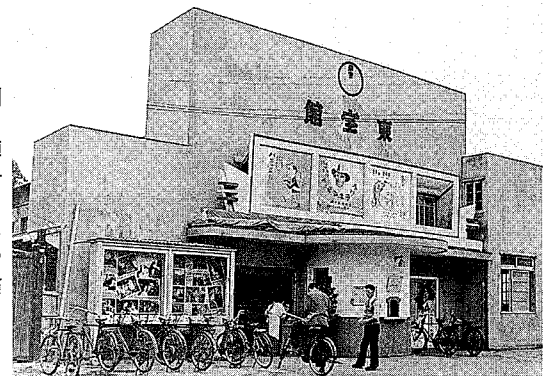
山崎宇三郎氏でした。アメリカで農業を営み、成功して日本に帰っての事業でした。
 ○山崎晶義氏談。
 新道の柏又近くにあった芝居小屋を譲り受けて、東宝館を作ったということです。(関東大震災後、しんみちにできたという「清楽亭」かなと思います)開業当時は座敷でした。
 はじめから東宝映画でした。エノケン(榎本健二)の「法界坊」など、お客さんがよく入りました。
 「日本沈没」は大入りでした。昭和四十八年頃の正月興行で、連日満員の状態が続きました。「東京オリンピック」上映も、お客さんを集めました。政治家の「オリンピックの記録映画らしくない」という発言が関心をよんで、盛況で最高の入りでした。ありがたい発言でした。記録重視の映画だと、一般の人には味気ない映像で興味をよばないように思いました。

掲載できなかった映画館や、経営関係者の企業努力や見解・逸話などひき出せなかった不手際等のまずさをお詫びします。
 映画好き人口が多かった土地柄、映画興行に熱心だった地元有志等、見えた手応えを感じます。映画を通して、小田原の文化的風土を育んでくれた関係者を再認識することに役立つたら幸いです。
 (文責 石綿 勉)

○和田博子さんの話

(岡西甘味喫茶店夫人)

東宝館のお客さんが、お店によく来しました。かき氷、みつ豆、お汁粉、おでん、大判焼きなど食べて帰りました。——映画館と商店街との有機的なつながりを知る一つの情報です。



▲改築以前の東宝館

小田原市役所提供